

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

キメラ語形について(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2006-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 齋, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/628

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



キメラ語形について (1)*

太 田 齋

§1. キメラ語形とは

いかなる国、地域のことばにも、様々なことば遊びがある。日本語でいうところの駄洒落はその一つと言えよう。この駄洒落で良く見られるのはある語と同音（もしくは類音）異義語をくっつけて、意味的なズレで可笑しさを狙うものである。中国語においても同様のことば遊びがあり、歇後語にもこのような駄洒落を利用したものが含まれる。本稿で扱うのはその場限りで消えてしまうような駄洒落が、語彙として定着してしまったかのようなものを対象とする。専ら同音（もしくは類音）関係によって、二つの語が強引に接合されたかのような語形である。出来上がった結果は単語として、構造的に破綻を来たしているとしか言い様のないものになっており、これが場合によっては指示対象の混乱を招いているのではないかと思われる。本稿ではこのような語形の例を採り上げる。以下筆者の既往の研究で既に取り上げているものもまた例示することになるが、それらに関しての説明は見解の変ったところ以外は簡単に済ませたい。方言データの所拠文献一覧については網羅的に挙げると、かなり紙幅を費やさねばならなくなる。禁じ手ではあるが、筆者が代表となった科学研究費研究の研究成果報告書のうちの1冊である目録（太田2002a）を以て代え、それに洩れるもののみを挙げることにしたい。

手前味噌ではあるが、同じく筆者が代表となった科学研究費研究の研究成果報告書のうちの別の1冊『漢語方言地図集（稿）第4集』（太田2004）の序論でもう少し詳しく紹介している。正式出版されたものではないので、目

にすることが容易ではない人もいるかと思われる。少し長いが、以下に「序論：常用語彙に見られる変容のあり方」で述べた部分を紹介したい。

当て字が定着すると、時には更に連想が働いて、本来全く関連のない語が結び付けられてしまうようなケースもある。その構成のあり方を見ると、地口が単語として固まったかのような感がある。例えば「入谷の鬼子母神」を「恐れ入谷の鬼子母神」と言うが如きである。例えば「当て字」を中国語では“白字”というが、山東方言にはこれを“叔伯字”と言う例がある。或いは“叔白字”と表記すべきであろうか。当該方言では“白”と“伯”の発音が同じであることを契機に、本来意味的に関係のないものを結びつけた例である。「雄ヤギ」を北方方言で“臊胡”というところが多いが（“臊戸”などこれ以外の漢字表記の場合もある）、中には“臊葫芦”と言うようなところもある。これは“臊胡”の“胡”から、“葫芦”（ヒョウタン）が連想されて、両者（雄ヤギとヒョウタン）がくっつけられて、キメラのような単語が出来た訳である。「コウモリ」に関しても同様な例があり、山西省臨汾方言では“夜瓢葫芦 ia² c^hiau xu ləu”と言う。これは“夜蝙蝠”が連音変化の結果“夜瓢胡”のような発音になり、その“瓢胡”から“瓢葫芦：ヒョウタン”への連想が働いた結果と考えられる。同じ山西省の洪洞方言では「ヒョウタン」ではなく、“夜瓢胡”の“胡”と「いびき」が結び付けられ、“夜瓢呼嚕 id⁵³⁻⁴⁴ p^hiao²⁰ xu²¹ lou²⁰”となっている。この手の地口風語構成はこのような「尻取り式」の他、「入れ子式」のものもある。例えば河南省確山方言では「蚊」のことを“哑巴蚊子/ya⁵⁵ ba³ wen⁴² zi³/”という。この方言では「昨日」のことを“夜儿/yar³¹/”というから、恐らく“夜蚊子/ya⁵⁵ wen⁴² zi³/”（このような語形がこの方言に実在するかどうか不明）と“哑巴”が関連付けられて、“哑巴蚊子”となったものであろう。「コウモリ」を山西の河曲方言では“夜蝙蝠媳妇儿”という（音声記号省略）。これは“夜蝙蝠(儿)”の一種の擬人化であろうが、“蝠”と“妇”が結び付けられて、“媳妇(儿)”が“夜蝙蝠(儿)”

に埋め込まれたものである。“儿”は“夜蝙蝠”の方に付いていたものか、“媳妇”の方に付いていたものか判断できないので()に入れて表記しておく。もっともこの方言では「アリ」も“蚂蚁媳妇子”となっており、同じ山西省の清徐、天鎮方言では「アリ」が“蚂蚁媳妇儿”となっているのに対し、「コウモリ」の方は清徐方言で“夜别胡”，天鎮方言で“夜蝙蝠儿”と，“媳妇”が内に含まれていないから、このような「入れ子式」は「アリ」に起こったもので、河曲方言では類音関係にある「コウモリ」にそれが類推適用されたと見なす方が良さそうである。

ときにはこのような地口風語構成は重ねてとられる当該音節の同定の助けとなっている。例えば「コウモリ」を湖北省陽新方言では“屋檐老鼠 u⁴⁵ iɛ²¹² lo²¹ cy²¹”と言う。これは“檐老鼠”に“屋檐”が関連付けられて“屋檐老鼠”となったものだが、これによって [iɛ²¹²] の語源が“檐”であることを鮮明に示すことになっている。無論これが民間語源であることは言を待たない。この他，“鼠”を語幹とする「コウモリ」語形の中には，“偷盐老鼠”，“偷油老鼠”，“添油老鼠”，“跳檐老鼠”のような例，また“飞鼠”を基にしたと思われる“飞翔鼠”というような例がある。このような多音節化は個別的な変化によって規則的な対応を示す字音の枠からはみ出たような音節の語源認定に益するところがある反面，多音節語であるが故に常用語彙としての適性を損なうことにもなる。その結果，音節の縮約が起こる。例えば北方方言の多くでは「ヤモリ」を“蝎虎”と言うが，これは本来“壁虎”であったものが，「コウモリ」との混交が起こって，音声的に似通ってしまったために，説明の要素として“蝎”をつけて“蝎壁虎”としたものが，後に音節の縮約が起こって“蝎虎”となったものではないかと考える（「コウモリ」の方には何故縮約が起きないのかという疑問には今説得力のある答えを持たない）。これは推測に過ぎないが，当面の説明のための比喩として用いることに問題はなかろう。このような縮約によって科学的な語源同定が一層困難になっていることもあるであろう。(pp.3-4)

上掲引用文は序論として書いたもので例示を最小限に抑えてある。本稿では他の例とともに、ここで採り上げたものも具体例を増やし、改めて紹介する。なお筆者のこれまでのこのような事象に対する言及、例えば太田2002b, p.78及び p.84注(15)及びこの引用文では名称に窮して、「尻取り式(複合語)」、「入れ子式(複合語)」というような呼び方をしているが、今後は総称として「キメラ(Chimera)語形」という名称を用いることにしたい。機能的な面から見れば「駄洒落語形」というような名称で呼ぶこともできようが、「尻取り式(複合語)」、「入れ子式(複合語)」が構造的な面から見た名称なので、総称としても「キメラ語形」というのがふさわしい。

「キメラ語形」であるか否かは、構成要素間に意味的関連があるかどうかといった点も判定基準となるが、意味は捉えどころがないので境界は曖昧である。例えば上掲文の“屋檐老鼠”は、その由来をさておいて、“檐老鼠”という語形が語源を正しく継承しているものとして、これを基に考えれば、“檐”であることを認識し易いように、説明の要素として“屋”を“檐”に添えたということになり、全体として意味的な纏まりを呈しているので、「キメラ語形」とは認め難い。しかし恐らくは“夜老鼠”を語源としており、特殊な変化を蒙って“檐老鼠”と漢字表記されるような音声形式になったものであろう。そうであれば、“夜 [ian] 老鼠”が、“夜 [ian]”と“檐”が同音(もしくは類音)関係にあることから、“夜 [ian] 老鼠”と“屋檐”を接合したということになる。このように本来の語源に立ち戻って考えれば、「キメラ語形」と言える。以下の議論で対象とする語彙はその生成に関して複数の解釈の可能性のあるものが多く、今後の類例の蓄積を待って検討すれば、異なる結論に至るものもあろうかと思う。

一点上掲引用文で訂正せねばならないところがある。それは、「入谷の鬼子母神」を「恐れ入谷の鬼子母神」というところである。「恐れ入谷の鬼子母神」は「恐れ入りやした」というべきところに、この「入谷の鬼子母神」を接合したと見るべきで、余計な部分は「入谷の鬼子母神」の方である。こ

の場合には、意味的に関連のないものを接合することによって、茶化して本来表出すべき意味内容を不明瞭にし、深刻さを和らげる（発話者にとっては罪悪感、後ろめたさの軽減に繋がる）といった効能を認めることができる。

このような接合語形は全体として情報が曖昧であるだけに、恐らくは文脈に依存することが多く、構成要素の何れの意味で用いられるのか、必ずしも明示的ではないようである。元々モノの名前は同一語源の語形であっても方言によっては異なる対象を指すことがある。以下の議論では「キメラ語形」となることで、そのような混乱を増長させることがあるのかどうかについても検討を加える。

§2. “叔伯”＋“白字”→“叔白字”

以下が“白字：当て字”の“白”と“伯”が同音（もしくは類音）であることで、“叔伯”と接合された例である。「尻取り式」語構成に属する。普通話では“白 bái”と“伯 bó, bǎi”（bǎiは“大伯子：義兄”のとき）で同音ではないが、かつては“白”には bó という音もあり、李白の白は bó と発音していた。この字音を持ち出せば、普通話でも説明できる。“白字 bózi”と“叔伯 shūbó”を接合して“叔伯字(儿)shūbózi”となる訳である。管見の及ぶ限りで“叔伯字”という表記の例は無い。山東莒県方言の例は声調が異なっているので、普通話で喩えれば“白字 báizi”と“叔伯 shūbǎi”を接合したようなものである。“白”と“伯”を結びつけるのに何故“叔伯”なのかということが問題となるが、これは“叔”と“书”が同音であることによるのではないかと思う。“～伯”という構成の常用語は“老～”以外だと、“大伯”、“二伯”、“三伯”のようなものしか無い。これでは“白字”とくっつけると、“伯”と認識することが困難になるであろう。

山東臨沂方言では“白字”と“岳伯”が接合されているが、“岳伯”というような親族名称は聞かない。“白字”から“读白字”の“读”を連想し、同義語の“阅”に取り換えて“阅白字”とした後に、“阅”を同音の“岳”に改め

たということであろうか。所拠文献には“岳白字 別字”とあるから，“岳白字”は「動詞+目的語」構造ではなく、全体で「当て字」という意味なのであろう。これについてはよく分からない。

“背字”も“白字”の“白”が類音関係にある“背”に取り換えられたと考えられる。この場合は“背”に「違反する」というような意味があるから、意味も考慮されたことであろう。“白字”ではなく“別字”が語源である可能性もあるが、報告例の地理的分布を見ると、この例もまた“白字”を語源とすると看做した方が良さそうである。

山东即墨：叔伯字兒 $\text{su}^{55-45} \text{pei}^0 \text{t}\theta\text{r}^{42}$ 別字 84 ← “叔伯” + “白字”

“白” = “伯” $\text{pei}^{42} \neq$ 別 $\text{pie}^{42} \neq$ 背 pei^{213} 24, 16, 24

山东临朐：叔伯字 $\text{su}^{55-213} \text{pei}^0 \text{t}\theta\text{r}^{42}$ 白字(旧) 37

山东平度：叔伯字(儿) $\text{fu}^{55-45} \text{pei}^0 \text{t}\theta\text{r}(\text{r})^{53}$ 別字 129 ← “叔伯” + “白字”

“白” = “伯” = “背” $\text{pei}^{53} \neq$ 別 pie^{53} 39, 29

山东青岛：叔伯字兒 $\text{fu}^{55-434} \text{pe}^0 \text{t}\theta\text{r}^{42}$ 別字 市志 109

山东莒南：叔伯字 $\text{su}^{213} \text{pei}^0 \text{t}\theta\text{r}^{31}$ 別字 临沂 196 ← “叔伯” + “白字”

山东莒县：写叔伯字兒 $\text{sie}^{55} \text{su}^{55-13} \text{pei}^0 \text{tser}^{31}$ 志 173

“白” $\text{pei}^{53} \neq$ “伯” $\text{pei}^{13} \neq$ 別 pie^{53} 39, 40

山东济南：念叔伯字 $\text{nia}^{21} \text{su}^{213-21} \text{pei}^0 \text{ts}\eta^0$ 念白字 词典 228

山东临沂兰山：岳伯字 $\text{ye}^{214-31} \text{pei}^0 \text{ts}\eta^{312}$ 別字 临沂 196

山东宁津：白字兒 $\text{pe}^{53} \text{ts}\eta\text{r}^{31}$ 136

山东济南：写白字 $\text{cie}^{55} \text{pei}^{42-55} \text{ts}\eta^0$ 写別字 词典 120

山东莱州：写白字兒 $\text{sie}^{55-45} \text{pei}^{42} \text{ts}^{\text{f}}\text{er}^0$ 写別字 方言志 196

山东淄川：背字 $\text{pei}^{31} \text{ts}\eta^{31}$ 別字：……背。有人写作“白”但声调不合 97

“白” $\text{pei}^{55} \neq$ “背” $\text{pei}^{31} \neq$ “伯” pei^{214} 24

山东博山：写背字 $ciə^{55-24}$ pei^{31} $tsɿ^0$ 写白字 研究 158

“白” pei^{55} ≠ “背” pei^{31} ≠ “伯” pei^{213} ≠ “伯” pei^{213} , pei^{55} 41, 45

山东莒县：写别字儿 sie^{55-13} pie^{53} $tser^{31}$ 志 173

“白” pei^{53} ≠ “背” pei^{31} ≠ “伯” pei^{13} 43

山东荣成：写别字儿 sie^{214} pie^{35} $tsɿr^{44}$ 志 120

“白” pe^{44} , pai^{42} , pai^{35} ≠ “背” pei^{42} , pei^{44} ≠ “伯” pe^{214} 27, 29, 31

山东宁津：错别字 $ts^h uə^{31}$ pie^{53-44} $tsɿ^{312}$ 136

山东临沂河东：错别字 $ts^h uə^{312}$ pie^{53} $tsɿ^{312}$ 别字 临沂 196

山东临沂罗庄：错别字 $t^h uə^{312}$ pie^{53} $tsɿ^{312}$ 别字 临沂 196

山东沂水：错别字 $t^h uə^{21}$ pie^{53} $ɬɿ^{21}$ 别字 临沂 196

山东蒙阴：错别字 $t^h uə^{21}$ pie^{53} $t^h ɿ^{21}$ 别字 临沂 196

§ 3.1. “夜蝙蝠” + “瓢葫芦” → “夜瓢葫芦”

「コウモリ」と「ヒョウタン」の合体であるが、これが成立するには「コウモリ」語形の“蝙蝠”に当る部分が $piau xu$ 若しくは $p^hiau xu$ になっている必要があるようである。つまり、 $pian fu \rightarrow piau fu \rightarrow piau xu \rightarrow p^hiau xu$ のような変化を経て、“瓢葫芦”の“瓢葫”の部分と同音（若しくは類音）関係にあることから、“夜瓢葫芦”のような接合語形が生まれたのであろう。 $iə piau xu$ の段階で“瓢葫芦”と接合され、然る後に $iə p^hiau xu lu$ となった可能性もある。臨汾、洪洞いずれの方言も“儿”は北京語同様に、 $ə$ と発音され、「兒化」も北京語同様、語幹音節と融合してそり舌音となるタイプであるが、これらの方言のかつての“儿”尾は $zə(?)$, $zə(?)$, $lə(?)$ のような音節だったかも知れず、そうであれば“夜蝙蝠儿”の“蝙蝠儿”の部分が“瓢葫芦”と音声的類似を示していたということになる。いずれにせよ、「尻取り式」語構成に属する。洪洞方言の場合は「イビキ」とくっついた例だが、“夜蝙蝠”と“呼嚕”が合体したのか、それとも“夜瓢葫芦”を経由して、“葫

芦”と“呼嚕”が同音（若しくは類音）であるところから、連想が及んで“呼嚕”に取り換えられたものか、二様の推定が可能であろう。但し“蝠”の部分は軽声音節であることが多く、目立たない。“夜蝙蝠”と“呼嚕”の重なり部分は“蝠”と“呼”の部分だけである。そのような音節だけをきっかけとして他の類音語と結び付けられるとは考え難いので、“夜瓢葫芦”を經由したと考える方が妥当であろう。

臨汾方言の“夜瓢蛄蛄”もまた“夜瓢葫芦”を經由したものでであろう。なぜ“蛄蛄”となったのか不明である。現在のところ、説得力のある解釈を提示することはできない。とりあえずの解釈として二つの見方を挙げておこう。その一つは“蛄蛄”が「ケラ」を指すと見るものである。所拠文献に「ケラ」は載っていない。山西方言では“蛄蛄”というような語形の報告は見当たらず、全て“蛄蛄”という形式しかない（この前後に付く要素については考慮に入れていない）。しかし近隣の方言で“蛄蛄”に該当すると思しき形式も存在するので、“夜瓢葫芦”の“葫芦”と“蛄蛄”が類音であることにより接合されたと見る。山西河津の“葫芦虫”は“蛄蛄虫”を語源とするらしく思える。そうであれば類音牽引で成立したものでであろう。

もう一つの見方は“蛄蛄”が「ネズミ」を指すというものである。「ネズミ」は穀物を食い荒らすためか、タブー語として“耗子”、“高客子”などのように言い換えられることが多い。このような言い換えが絡むのか、以下に挙げるような語形が存在する。その中で、“蛄儿”と漢字表記されるような語形が、“夜瓢葫芦”の“葫芦”と類音であることから結びつけられたとする見方である。山西方言では“儿”尾が語幹に融合せずに独立を保っている例が見られる。そのような音声形式であれば、“葫芦”との間に音声的類似を認めることができよう。“杳見家”の“杳見”もこれに関わっているかも知れない。山西左権方言の“圪老儿家 kə²⁴ lor⁵³ ia⁰”はそのような見方を支持する例であると言えよう。

- 山西临汾：夜瓢葫芦 ia^ɔ c^hia^u xu ləu 普通 3724 ←“夜蝙蝠”+“瓢葫芦”
 山西洪洞：夜瓢呼噜 id⁵³⁻⁴⁴ p^hiao²⁰ xu²¹ lou²⁰ 蝙蝠 33 ←“夜蝙蝠”+“呼噜”
 陕西商县：夜蝙蝠子 ie⁵⁵ piao⁵³ fu²¹ tsɿ⁵³⁻²¹ 蝙蝠 64
 陕西西安：夜标呼儿 ie⁴⁴ pia^u²¹ xur⁰ 蝙蝠 词典 100
 陕西兴平：夜蝙蝠 ie⁵⁵ pia^u³¹ xu³¹ 蝙蝠(乡下) 811
 山西汾西：夜瓢呼 ia⁵³ p^hiao¹¹ xβ⁰ 蝙蝠 31
 山西临汾屯里：夜蝙蝠 ia⁵¹⁻⁵⁵ p^hiao²² xu²² 蝙蝠 樋口 15
 山西临汾：夜瓢蛄蝼 ia⁵⁵ p^hiau²¹⁻³³ ku⁵¹ ləu⁰ 蝙蝠 方言志 72

- 河南洛阳：蛄蝼子 ku³³ lu⁰ tsə⁰ 蝼蛄 研究 143
 山西河津：葫芦虫 xu³²⁴ ləu⁰ p^həŋ³²⁴ 蝼蛄 研究 143
 陕西凤县：地蛄蝼 ti⁴⁴ ku³¹ lou⁰² 蝼蛄 研究 143
 陕西凤县：地蛄牛 ti⁴⁴ ku³¹ niou³¹ 蝼蛄(瓦房坝) 研究 143 ←“地蛄蝼”?

- 山西平遥：蛄儿 ku¹³⁻³¹ ʒ^Δ?²³⁻⁴⁵ 老鼠 民俗 72
 山西孝义：蛄儿 kur¹¹⁻⁵³ 老鼠 86
 山西介休：口儿 kur⁴⁵ 老鼠 42
 山西临县：蛄儿 kur²⁴ 老鼠 40
 山西文水：蛄儿 ku²²⁻¹¹ e²²⁻³⁵ 老鼠 ②72
 山西文水：毛蛄儿 mau²² ku²²⁻¹¹ e²²⁻³⁵ 老鼠 ②72
 山西清徐：(毛)蛄儿 (mou¹¹) ku¹¹ ai¹¹⁻¹⁰ 老鼠 36
 山西交城：毛蛄儿 mou¹¹ ku¹¹ er¹¹ 老鼠 768
 山西左权：圪老儿家 kəʔ²⁻⁴ lor⁵³ ia⁰ 老鼠 40
 山西大宁：昏兒家 kəʔ²¹ la⁵¹ tciA⁰ 老鼠 485
 山西中阳：昏兒家 kəʔ² la⁵³ tciA⁰ 老鼠 72
 山西临县：昏兒家 kəʔ²⁴⁻²¹ la⁵³ tciəʔ⁴⁴ 老鼠 40
 山西洪洞：圪拉里家 ku²⁴⁻²² la³⁰ li³⁰ tia³⁰ 老鼠 33

山西汾西：圪兒里家 $kə^{33} la^0 li^0 tə^0$ 老鼠 31

山西武乡：翁吞兒里家 老鼠(讳言) 465

山西陵川：缸吞兒 $kaŋ^{33} kɤʔ^{34} laʔ^{34-0}$ 老鼠 46

山西汾西：老穀 $lao^{33} kβ^0$ 老鼠 31

山西平遥：猴咕咕 $xəu^{13} ku^{13-31} ku^{13-35}$ 小老鼠 民俗 72

§3.2. “臊胡”+“葫芦”→“臊葫芦”

この場合は“臊胡：雄ヤギ”と“葫芦：ヒョウタン”を結びつけたと考えられる。「尻取り式」語構成に属する。但しその成立過程はいきなり両者を結びつけたのではない可能性もある。「雄ヤギ」に“骨驴”というような語形があることを考えると、“臊胡”と“骨驴”（この語で二つの音節がk- l-であるような以下の挙例に見られる諸語形を代表させる）という二つの方言語形が合体して、漢字表記すれば、“臊骨驴”もしくは“臊葫芦”のような語形が先ず出来上がり、これを經由して成立したものである可能性が高い。超方言的音声表記で概略を示せば

I

II

III

IV

$sau xu + ku(əʔ)ly(əʔ) \rightarrow sau ku(əʔ)ly(əʔ) \rightarrow sau xu(əʔ)ly(əʔ) \rightarrow sau xu lu;$

というような変化を辿ったという可能性である。但しステージII, IIIに該当する語形の報告例が全く見当たらない。“臊胡”と“骨驴”の合体から一気に飛躍して“臊葫芦”のような語形が成立した可能性（I→III→IV）も無いではないが、現時点ではそれを積極的に支持するようなデータは無い。

“胡驴”のような語形についても全く報告例が無いが、これに似た語形として河北深県方言の“呼喽”，武強方言の“呼嚕”がある。恐らく類音牽引によって，“骨驴”が「イビキ」と一致してしまったということだろう。筆者の調査した限りでは2例のみであるが、何れも河北方言であることは注目

すべきである。このような変化を前提とすれば、“骨驴”が“呼嚕”となって、類音の“葫芦”に置き換えられ、これが“臊胡”と接合された、ということが考えられる。前節で見たように、“葫芦”と“呼嚕”は同音関係によって容易に結び付けられるようなものである。但し“臊葫芦”はあるが、“臊呼嚕”という語形は見当たらないということは、この解釈の弱点である。

上記の可能性は完全に否定されたという訳ではないが、結局のところこの例もまた冒頭で提起した語構成と看做すべきではないかということになる。つまり、“臊胡”の“臊胡”の“胡”と“葫芦”の“葫”の同音関係を利用して両者を合体させて“臊葫芦”のような語形を作り上げた。そしてそのような語形を生み出すには“骨驴”という方言語形の存在が促進作用としてはたらいた、と考えるべきではないか。

河北唐县：臊葫芦 so³¹ xu³ lu⁵⁵ 种公羊 748

北京平谷：臊葫芦 sau³⁵⁻⁵⁵ xu⁰ lu²¹⁴ 种公羊 178

河北满城：臊葫芦 种公山羊 835

山西屯留：骨□ kəʔ⁴⁵ ly¹³ 公山羊 34

山西晋城：骨□ kuəʔ²²⁻⁰⁵ lyə⁰² 公山羊 38

cf. 山西文水：骨驴儿 kuəʔ³¹² lɥ²² e²²⁻²³ 山羊 47

cf. 山西沁县：□□ ku²¹³⁻¹³ ər²¹³ 山羊 27

cf. 山西榆次：骨联 kuΛ⁵⁴ lye³⁵ 山羊 1017

cf. 山西交城：羯羴儿 kuəʔ³ ly¹¹ ər¹¹ 山羊 767

cf. 山西孟县：骨驴 kuΛ² ly²² 山羊 33

cf. 山西清徐：骨驴儿 kuəʔ² ly¹¹ e¹¹⁻¹ 山羊 35

山西长治：(羯)骨虑 (tciəʔ⁵⁴) kuəʔ⁵⁴ ly⁵³ 公山羊 78

山西交城：羯羴儿 tciəʔ³ kuəʔ³ ly¹¹ ər¹¹ 公山羊 767

山西孟县：羯骨驴 tciΛ² kuΛ² ly²² 公山羊 33

- 山西武乡：羯骨鹿 tciɿʔ³ kuəʔ³ luəʔ³ 公山羊 27
 山西长子：羯谷类 tciɿʔ⁴ kuəʔ⁴ luei⁵³ 公山羊 43
 山西沁县：羯口口 tciɿʔ⁴ ku²¹³⁻¹³ ər²¹³ 公山羊 27
 山西左权：羯骨吕 tciɿʔ² kuəʔ²⁻⁴ ly⁵³ 阉公山羊 40
 山西清徐：羯骨驴儿 tciɿʔ¹¹ kuəʔ² ly¹¹ 骗过的公山羊 35
 cf. 山西清徐：羴骨驴儿 ti¹¹ kuəʔ² ly¹¹ 未骗的公山羊 35
 cf. 山西左权：母骨吕 mu⁵³ kuəʔ²⁻⁴ ly⁵³ 母山羊 40
 cf. 山西清徐：母骨驴儿 mu⁵³ kuəʔ² ly¹¹ e¹¹⁻¹ 母山羊 35
 cf. 山西长治：母骨虑 mu⁵³⁵ kuəʔ⁵⁴ ly⁵³ 母山羊 78

- 山西左权：臊胡 so⁵³ xu²¹ 种公山羊 40
 山西文水：臊胡儿 sau²²⁻¹¹ xu²²⁻²³ e²² 种山羊 ①47
 山西太原北郊区：臊胡子 sau³³ xu⁰ tsə⁰ 公山羊 201
 山东兖州：臊胡子 so²¹³⁻²¹¹ xu⁰ tsɿ⁰ 雄山羊 848
 甘肃张家川：臊胡子羊 sao²¹³ xu²⁴ tsɿ⁰² iã⁰² 公山羊 1413
 陕西凤县：臊胡羊 sau³¹ xu³¹ iaŋ²⁴ 种公羊 589
 山西广灵：臊猴子 saO⁵³ xəu³¹ tsɿ⁰ 25
 山西原平：臊狐 so²¹³ xu³³⁻³¹ 公种羊 73
 山西乡宁：臊狐 sao⁵³ xu¹¹ 公种羊 674
 山西汾西：臊狐 sao¹¹ xβ⁰ 公山羊 31
 山东微山：臊狐子 so²¹³⁻²¹ xu⁰ tsɿ⁰ 未骗的公羊 1125
 河南扶沟：臊狐子 sao²⁴ xu⁴⁴ tsɿ⁰ 公羊 651
 山东苍山：臊狐儿 so²¹³ xur⁰ 未骗的公羊 693
 山东枣庄市中区：臊狐头 公羊 911
 山西沁源：骚虎 种羊 473
 河南登封：臊虎/sao⁴⁴ hu⁴¹/ 公山羊 796
 山西大宁：臊虎 sau²¹ xu⁰ 公山羊 485

陝西陇县：臊虎羊 sau⁵³ xu³¹ iaŋ²⁴ 种公羊 950

山西静乐：臊户 sau²⁴ xu⁵³ 种山羊 研究 213

河北深县：呼喽 xu³³ lou⁰ 公羊 543

河北武强：呼噜 种公羊 672

cf.河北巨鹿：呼噜 xu³³ lu³¹ 鼾声 719

cf.河北宁晋：打呼噜 ta⁵⁵⁻⁴⁵ xu³³ lu⁰ 218

cf.河北涉县：打呵喽 ta³⁵ xɤ³¹⁻³³ lou⁰ 打呼噜 870

河北黄骅：泡虎子 未阉山羊、绵羊 494

河北故城：泡户 p^hau²¹⁴⁻²⁴ xu⁰ 臊户 县志 800

河北南皮：咆虎 p^hau⁴¹ xu²⁰ 公羊 916

河北河间：泡葫芦 p^hau⁴⁴ xu⁰ lu⁰ 公羊 775

cf.河北固安：跑乎鲁 p^hau²¹⁴⁻²¹ xu⁰ lu²¹⁴ 配种用的公猪 833

cf.河北枣强：跑葫芦 未阉公猪 873

cf.河北滦南：跑拉 p^hau²¹⁴ lə⁰ 未阉的公猪 818

河北吴桥：泡谷/pāo gū/ 种猪、种羊 528

河北阜城：泡牯/pào gu/ 公羊 849

山东德州：口戥 p^ha²¹³⁻²¹ ku⁰ 公羊 125

山东滨州：趴牯 公羊 704

山东平原：扒牯/ba²¹⁴ gou²¹/ 公羊 725

興味深いことに、「オスヤギ」には“泡葫芦”という語形もあり、「オスブタ」だと“跑乎鲁”“跑葫芦”という語形がある。これらに見られる“跑”，“泡”，“咆”の語源は恐らく“脬：臬丸”であろう。「オウシ」の語彙にも同じ要素を見出すことができる。これについては太田2004, pp.222-223で指摘したが、公刊の論文では言及していないので、別稿で改めて論ずることにしたい。

§ 3.3. “胡蜂” + “葫芦” → “葫芦蜂”

“胡蜂”は「スズメバチ」を指す。これと「ヒョウタン」を意味する“葫芦”が合体して，“葫芦蜂”となっている語形がある。「入れ子式」語構成である。これは以下の昆明方言所拠文献の語釈にある通り，胸部と腹部の間がくびれて細くなっているのので，そこから「ヒョウタン」を連想するというこ
とらしい。筆者の集めたデータでは雲南に多く見られる。安徽省休寧の例は
“胡蜂”+“狐狸”で出来たものか，それとも“葫芦蜂”を経由してできたもの
か不明である。管見の及ぶ限りではこれと同じ語形の報告例は無い。

河北内邱：葫芦蜂 xu³³⁻³⁵ lu⁰ p^həŋ⁰ 922

云南昆明：葫芦蜂 fu³¹ lu²¹² foŋ⁴⁴ 胡蜂；马蜂。因胡蜂、马蜂胸腹连接处较
细，形如葫芦，故称 昆明方言词典 180

云南永胜：葫芦蜂 fu³¹ nu⁴⁵ foŋ⁴³⁴ 马蜂 110

云南维西：葫芦蜂 fu³¹ lu²¹³ foŋ⁴⁴ 马蜂 129

云南西畴：葫芦蜂 fu⁴² lu²¹¹ foŋ⁴⁵ 胡蜂 128

云南保山：葫芦蜂 fu³¹ lu⁴⁴ foŋ⁴⁴ 胡蜂 91

云南巧家：葫芦蜂 k^hu³¹ nu⁴⁵ foŋ⁴⁴ = 狗屎马蜂 94

湖北鄂州：葫芦蜂子 k^hu²¹ leu²¹ foŋ⁴⁴ tsɿ⁴² 169

安徽休宁：狐狸蜂 xu⁵⁵ li⁵⁵ fæn³⁵ 马蜂 省志 500

宁夏中卫：胡蜂 xu⁵³ fəŋ⁴⁴ 107

新疆乌鲁木齐：胡蜂 xu²⁴ fəŋ²¹ 回民 100

陕西商县：葫芦暴 xu³⁵ lou⁵³ pao⁵⁵ 大蜂 63

云南巧家：葫芦包 k^hu³¹ nu⁴⁵ pao⁴⁴ = 狗屎马蜂 94

云南澄江：葫芦包 xu³¹ lu²¹² pao⁴⁴ 葫芦蜂 143

云南玉溪：葫芦包 hu³¹⁻⁴⁴ lu²¹³ pao⁴⁴ 葫芦蜂 128

関連語形として、“葫芦包”というのがあるが、これについては由来が分からない。“蜂”はp^həŋのような、声母がp^hで現われることがあるが、殆ど“马蜂”という語形においてであって、“胡蜂”という語形ではf-若しくはx-でしか現われない。p-で現われることもないので、“葫芦包”が“胡蜂”を基にして出来た語形であるにしても、“葫芦蜂”とは異なる成立過程を経たものであろう。これもまた別稿で論ずることにしたい。

§ 4. “酒窝” + “喝酒” → “喝酒窝”

“酒窝：えくぼ”に“喝酒”を前接して“喝酒窝”としたもので、「尻取り式」語構成である。今のところ河南省の方言でしか該当例を見出していない。

河南郑州：酒窝儿 tsiou⁵³ uor²⁴ 99

河南濮阳：酒窝儿 tsiou⁵⁵ yuor²⁴ 93

河南西华：喝酒窝儿 /he²⁴ jiu⁵⁵ wo²⁴/ 脸蛋呈现窝形 597

河南漯河：喝酒窝儿 /he²⁴ jiu⁵⁵ uo²⁴/ 酒窝 1031 (应删“儿”，或uo²⁴当作uor²⁴)

河南台前：喝嘴窝 酒窝 614

末尾の台前方言の例はもしミスプリでなければ、以下のいずれかのような同化現象を経たものであろう。

xə tsjəu uə → xə tsuei uə

(不完全な豊韻化。介音が一致。メタテーゼでもある)

xə tsjəu uə → *xə tsuəu uə → xə tsuei uə

第二音節と第三音節の間で介音を一致させた、不完全な豊韻化と言える。上段のような段階を経たものであれば、第二音節内部でメタテーゼが起こったとも言える。下段の場合だと、第二音節と第三音節の間で介音を一致させた

が、音素配列論 (Phonotactics) 上の制約に抵触するので、この形で実在することなく直ぐに近似の音に移行したということになる。管見の及ぶ限りで、音節内部の構成要素のメタテーゼと思しき例は皆無に近い。かろうじて該当しそうなのが以下の例で、最後の1例以外は同一語源の語と考えられるが、 $kə\ ts/tɕiəu \rightarrow kə\ tsuəi$ なのか、 $kə\ tsuəi \rightarrow kə\ ts/tɕiəu$ なのか分からない。台前方言の“酒”→“嘴”がこれと同じ音声形式であることが興味深い。或はこれに倣って変化したと考えるべきか？

河北魏县：鼓堆 /gézui/ 蹲下，堆(dui)。FPJ6/116

格就 /géjiù/ 蹲。FPJ6/116

河北南，西部：圪就 /gējiu/ 蹲 FPJ8/85

河南邓州：圪就 $ku^{44} tsiou^0$ 蹲 115

河南修武：/gégìu/ 作动词用。相当普通话的“蹲”。FPJ3/19

河南南阳：跽蹴/ge jiou/ 蹲下 606

河南林县：圪蹴 $kə? tsiu^{55}$ 蹲 616

内蒙古武川：圪就 蹲着 663

山东东平：骨堆 /gūzui/ 蹲 544

河南：孤堆 /gūzui/ 作动词用。相当普通话的“蹲(dui)” FPJ3/20

($ku\ tsuəi \rightarrow ku\ tsiəu \rightarrow kə\ tsiəu \rightarrow kə\ tɕiəu$ 介音の弱化も絡む；或は
 $kə\ tsiəu \rightarrow kə\ tsuəi \rightarrow ku\ tsuəi$ 介音の一致とも言える。音素配列論上の制約で $ts-$ と $tɕ-$ が交替)

河南商水：骨堆/gu²⁴⁻²² dui⁰/下蹲 381

河北南部：咕堆/gūdui/蹲 FPJ8/86

山东德州：跼丢 $ku^{42-55} tiou^0$ ①蹲②躺着蜷腿并收缩身子 142

($ku\ tuəi \rightarrow ku\ tiəu$; 或 $ku\ tiəu \rightarrow ku\ tuəi$)

?河南获嘉：□土 $luei^{13} t^h u^{53}$ 土由高处顺坡下流 195←“流土”?

($liəu\ t^h u \rightarrow luei\ t^h u$ 介音を揃えた不完全な畳韻化とも言える)

§ 5.1. “打碗” + “蜗牛牛” → “打碗牛牛”

山西静乐：打碗牛牛 tā³¹⁴⁻³⁵ vǎi³¹⁴⁻³¹ niɿu³³ niɿu³³ 蜗牛 研究 215

山西榆次：打碗牛牛 ta⁵³⁻¹¹ ve⁵³ niɿ¹¹ niɿ¹¹ 蜗牛 1019

山西阳曲：大蜗牛牛 ta³⁵³ uɿ²¹³ niei²² niei²² 蜗牛 75

山西大同：蜗牛儿 vo³¹ niour³¹³ 67

山西天镇：蜗牛 kuΛ³¹/uΛ³¹ niou²² 37

山西太原：蜗牛 vɿ¹¹ niou¹¹ 词典 81

甘肃皋兰：蜗蜗牛 kua²² kua²¹¹ liou⁵³ 蜗牛、田螺 830

陕西凤翔：大蜗蜗牛 ta⁴⁴ kud⁵² kud⁰ niou²⁴⁻³¹ 螺丝 924

蜗蜗牛 kud⁵² kud⁰ niou²⁴⁻³¹ 蜗牛 924

山西永济：蜗牛 kuǎi²¹ niou²⁴ 36

山西吉县：蜗牛 kuǎi³³ ŋou¹³ 37

山西万荣：蜗牛 kuǎi⁵¹ ŋeu²⁴ 词典 310

山西运城：蜗牛 kuǎi³¹ ŋou¹³ 39

山西平陆：官牛 kuan³¹ ŋeu¹³ 蜗牛 40

山西洪洞：官牛 kuan²¹ niou²⁰ 蜗牛 33

山西乡宁：冠牛 kuǎi⁵³ niou²¹⁴ 蜗牛 675

山西临汾屯里：冠牛 kuai²² niou³⁵⁻²² 蜗牛 19

陕西韩城：蜗牛子 /ɕguan c[ŋ]ou zi/ 蜗牛 932

河北灵寿：牛牛 niou²² niou⁰ 沼螺 705

河北深泽：牛牛 niou⁴⁵ niou⁰ 蜗牛 571

河北巨鹿：扭牛 niou⁵⁵ niou³¹ 螺 697 ← “牛牛”

山东兖州：蚰蚰儿 iou⁴²⁻⁴⁴ iour⁰ 旱蜗牛 848 ← “牛牛儿”

“打碗牛牛”は山西方言の上記2例のみ。このような語形の成立は“蜗”に後続する“牛”の字音の声母が鼻音 (n-, n-, ŋ-) かゼロ声母かということと関係する。つまり“蜗”が後続する“牛”の声母の入り渡りの鼻音を韻尾として取り込んで uan/uən niu, uaŋ/uəŋ ŋəu のような逆行同化を生じたのである。

uə/ua niəu niəu → uən n/niəu → uan niəu niəu → ta uan niəu niəu;

蜗牛牛

碗牛牛

打碗+碗牛牛

uə/ua ŋəu ŋəu → uəŋ ŋəu → uaŋ ŋəu ŋəu → ta uaŋ ŋəu ŋəu

蜗牛牛

碗牛牛

打碗+碗牛牛

「尻取り式」語構成である。山東方言では“牛”を普通話同様に niəu のように発音する方言が少なくないが、「カタツムリ」の語形中に現れる“牛”は字源についての認識が曖昧になっているのか、ゼロ声母で現われることが多く、そのため方言調査報告を見ると、“由”、“油”、“蚰”といった当て字で表記されることが多い。このような当て字が通行することで、方言固有の音声形式は安定して伝えられる。山東方言において中古疑母は、固有層ではゼロ声母で現れる。「カタツムリ」の語形ではそれが当て字が用いられることにより、よく伝えられていると言える。このような音声環境だと、“蜗”が陽韻尾韻化する要因が存在しない。これに対して山西方言の固有層の“牛”の声母は n-, n-, ŋ- であり、“蜗”が陽韻尾韻化する要因を有する。ただ“蜗”は西北方言では多く k- 声母で現われるので、kuan, kuaŋ のような音になることが多い。kuan niəu, kuaŋ ŋəu のような語形から“打碗牛牛”という語形が生まれるということは極めて考え難い。少数ながらゼロ声母の“蜗”も存在しているので、ゼロ声母の形式を基にして上掲の推定変化過程を経て“打碗牛牛”という語形が生まれたと考えたい。

“蜗牛(儿/子)”, “蜗牛牛” という語形で“蜗”がゼロ声母で且つ陽韻尾韻

化しているという例（例えば uan/uən niu, uaŋ/uəŋ ŋəu のような音声形式）が見当たらないので、上記山西静楽、榆次方言の“打碗牛牛”は uan/uən niu, uaŋ/uəŋ ŋəu のような音声形式になった“蜗牛(儿/子)”に“打碗”が接合されたと見るよりは、“大蜗牛牛”の語形が連音変化を起こして、“打碗牛牛”のような語形になったと見るべきかも知れない。そうであれば“大蜗”から類音の“打碗”が連想されて、両者が結びつけられ、“打碗牛牛”が生じたということになる。但し“大碗牛牛”という語形の報告例が無いということはこの推定の妥当性を疑わせる。この変化に関与しそうな語に“打碗花”：コヒルガオと“大碗：どんぶり”“海碗：どんぶり”などがある。想像を逞しくして、山西では後者は用いないが、前者は用いるので、前者のみが“打碗牛牛”の成立に関与したという可能性も考えられないではないが、これらは管見の及ぶ方言調査報告の中では全く見かけないので、検証できない。

“大碗牛牛”の“大”は恐らく「カタツムリ」と「タニシ」を区別するために付加されたものと考えられる。上掲の陝西鳳翔方言では「タニシ」の方に“大”が付いて、「カタツムリ」の方はゼロであるが、逆に山西陽曲方言では「カタツムリ」の方に“大”が付いたのであろう。両者を区別しない方言も少なくなく、指示対象の混乱も関与しているかも知れない。ちなみに山西太原方言の「タニシ」には“小”が付いている。⁽¹⁾

山西太原：小海螺 *ɕiau*⁵³⁻¹¹ *xai*⁵³ *luɣ*¹¹ 螺蛳 词典 146

§ 5.2. “送饭”＋“花牛牛”→“送饭牛牛”

山西文水：送饭牛牛 *suəŋ*³²⁻²² *xuaŋ*³⁵ *niou*²² *niou*²² 瓢虫 72

cf. “花晔” *xua*²² 21；“放晃泛范樊贩饭犯幻宦患豢” *xuaŋ*³⁵ 41

山西灵石：送饭牛牛 *suŋ*⁵³ *xuā*⁵³ *niou*⁴⁴ *niou*⁴⁴ 瓢虫 603；f-x不分，都读为 x

cf. 蜜蜂 miəʔ³³ xuæ²¹⁴ 602

山西孝义：送饭牛牛 suŋ⁵³⁻¹¹ xuaŋ⁵³ niou¹¹ niou¹¹ 瓢虫 87

cf. “花华铎姁狡猾” xua²² 37；“饭贩犯范放换焕痰泛梵宦樊晃”
xuaŋ⁵³ 58

山西石楼：送饭牛牛 suŋ⁵² xuaŋ⁵² niəu⁴⁴ niəu⁴⁴ 瓢虫 470

cf. 反过脑来 xuaŋ⁴¹³ kuə⁵² nau³³ lei⁴⁴ 回头 474；f-x 不分，都
读为 x

cf. 花 xua⁴¹³ 棉花 469

山西离石：送饭老婆婆 suəŋ⁷ xuæ⁷ ˈlou ɛp^ho · p^ho 花大姐(瓢虫)

普通 3753

山西中阳：送饭老婆婆 suŋ⁴⁴ xuæ⁵³ lao²¹⁴ p^he⁴⁴ p^he⁰ 称种瓢虫的统称 73；

同音字表缺“饭”

cf. 做饭处 tɕ^hueʔ² xuæ⁵³ su⁰ 厨房 75

cf. 黑间饭 xəʔ² tɕie²⁴ xuæ⁵³ 晚饭 88

cf. “花华” xua²⁴ 28；“怀槐” xuæ⁴⁴ 37；“晚碗碗挽腕拔~草”
uæ²¹⁴ 37

山西平遥：送饭盔盔 suŋ³⁵⁻³¹ xuaŋ³⁵ k^huæ¹³⁻³¹ k^huæ¹³⁻³⁵ 瓢虫 民俗 74

cf. “花” xua¹³ 24；“范範犯泛换唤换贩饭” xuaŋ³⁵ 58

山西原平：送饭牛牛 suəŋ⁵³ fɛ̃⁵³⁻³¹ niɣu³³ niɣu³³ 74；“饭” fɛ̃⁵³ 43

cf. “花~灯” xua²¹³ 34；“欢~迎糴~油” xuɛ̃²¹³ 46；“荒~郊慌~忙”
xuɔ̃²¹³ 49

山西静乐：送饭牛牛 suə⁵³ fæ̃⁵³ niɣu³³ niɣu³³ 研究 215；“饭” fæ̃⁵³ 研究 141

cf. “花华铎慌荒惶” xuã²⁴ 研究 135

山西类烦：送饭牛牛 suəŋ⁵⁴ fæ⁵⁴ niu³³ niu³ 七星瓢虫 研究 77；“饭” fæ⁵⁴
研究 104

cf. “铎铎花华划, 动词” xuã³³ 研究 135

山西清徐：送饭牛牛 suã³⁵⁻¹¹ fe³⁵ niɣu¹¹ niɣu¹¹⁻¹ 瓢虫 36

cf. “花荒慌华中~铎划~破咧横黄簧潢璜磺皇蝗惶凰隍啐” xud¹¹ 34；

“欢还动词环寰桓隳” xue¹¹ 18

陕西神木：送饭牛牛 suɣ̃⁵³ fe⁵³ niəu⁴⁴ niəu²¹ 研究 362

cf. “铎划~船, ~开” xua⁴⁴；“花华中~” xua²¹³ 研究 210

“桓还~东西环” xue⁴⁴；“欢缓” xue²¹³ 研究 214

山西阳曲：送饭牛牛 suə̃⁴⁵³⁻⁵³ fe⁴⁵³ niei²² niei²² 瓢虫 75

cf. “花华中~华~山, 姓” xua²¹³ 35；“欢缓” xue²¹³ 44；“荒慌慌”

xuo²¹³ 46

内蒙临河：送饭牛牛 suŋ^ɔ fã^ɔ ɛniw niw 花大姐(瓢虫) 普通 3753

内蒙呼和浩特：送饭牛牛 suŋ^ɔ fã^ɔ ɛniəu niəu 花大姐(瓢虫) 普通 3753

内蒙二连浩特：送饭牛牛 suŋ^ɔ fæ^ɔ ɛniw niw 花大姐(瓢虫) 普通 3753

河北阳原：送饭牛 sũ^ɔ fē^ɔ ɛniu 花大姐(瓢虫) 普通 3753

河北张家口：送饭牛 suŋ²¹³ fan²¹³ niour⁴² 花大姐 1914

山西乡宁：送饭婆 suəŋ¹¹ fæ¹¹ p^hə²¹⁴ 瓢虫 675

cf. “桦” xua⁵³ 666；“欢” xuæ⁵³ 666；“荒” xuaŋ⁵³ 667

山西汾西：送饭婆婆 suəŋ⁵⁵ fã⁵³ p^hu³⁵⁻²² p^hu³⁵⁻⁵³ 花大姐 31

cf. “花” xud¹¹ 14；“欢荒慌慌” xuã¹¹ 20；“喝豁霍霍慌” xu¹¹ 13

山西孟县：送饭老婆子 suə̃⁴⁴ fã⁴⁴ lə⁵³ p^huo²² tsɣ[?] 瓢虫 34

cf. “花” xud⁴¹² 16；“欢荒慌” xuã⁴¹² 19；“荒慌” xuo⁴¹² 17

山西临县：送饭老婆婆 suəŋ⁵³⁻³¹ fæ⁵³ lou³¹²⁻³¹ p^hu⁴⁴ p^hu⁴⁴⁻²¹ 瓢虫 40

cf. “花华” xua²⁴ 19；“欢” xuæ²⁴ 20；“荒慌慌晃欢” xuo²⁴ 23；

“呼慌荒” xu²⁴ 23

陕西绥德：送饭老婆婆 suŋ^ɔ fæ^ɔ ɛlau ɛp^huo p^huo 花大姐(瓢虫) 普通
3753

山西古交：花牛牛 xud²² niei²² niei²² 瓢虫 581

山西介休：花牛牛 xua¹³⁻¹¹ niəu¹³⁻⁴⁵ niəu¹³⁻⁰ 花大姐 42

山西长治：花牛得 $\text{c}xua \text{ciəu} \text{tə}^?$ 花大姐(瓢虫) 普通 3753

河北承德：放牛小儿 $\text{faŋ}^? \text{niou} \text{ciəu} \text{ə}$ 瓢虫 637

陕西千阳：放牛娃 $\text{faŋ}^{44} \text{niou}^{24} \text{va}^0$ 瓢虫 359

cf. “方” faŋ 353 ; “话” xua 355 ; “欢” xuə 355 ; “荒” xuaŋ
355

陕西陇县：放牛娃 $\text{faŋ}^{44} \text{niou}^{31} \text{va}^0$ 瓢虫 950

cf. 欢喜 $\text{xuə}^{53} \text{ci}^{31}$ 947

cf. 黄先生 $\text{xuaŋ}^{31} \text{ciə}^{44} \text{səŋ}^{31}$ 948

cf. 花红 $\text{xua}^{53} \text{xuŋ}^{31}$ 沙果 951

山东章丘：泛花虫子 花大姐 605

河北饶阳：放迷糊药的 七星瓢虫 712

ここに見られる“送饭牛牛”という語形が成立するには、西北方言に見られる $\text{xu}:\text{f}$ - を区別しない特徴と韻尾の $-\text{n}:-\text{ŋ}$ を区別しない特徴が前提にあるのではないかと思われる。つまり、以下のような変化過程が推定される：

$\text{xua} \text{niəu} \text{niəu} \rightarrow \text{xuaŋ} \text{niəu} \text{niəu} \rightarrow \text{suəŋ} \text{xuaŋ} \text{niəu} \text{niəu}$

花牛牛 花牛牛→饭牛牛 送饭牛牛

$\text{xua} \text{niəu} \text{ua} \rightarrow \text{xuaŋ} \text{niəu} \text{ua}$

花牛娃 花牛娃→放牛娃

“花”が後続の“牛”の鼻音声母の影響で入り渡りの鼻音を自らの韻尾として取り込んで出来た xuaŋ という音節に当て字として“饭”若しくは“放”が用いられ，“饭牛牛”，“放牛牛”となり，特に后者から野良仕事（牛飼いをする）が連想されて，“送饭牛牛”ができたのではないかと思われる。「尻取り式」語構成である。そして“牛牛”から“妞妞”が連想されて，昼飯を届けるのは一般に妻であろうから，これが“老婆(婆)”，“老婆子”に変えられ

たということではなからうか？山西平遥方言の“送饭盔盔”については説明が難しい。

山西平遥：磕头婆婆 $k^h\Lambda\eta^{23} t\epsilon u^{13} p\epsilon i^{13} p\epsilon i^{13}$ 磕头虫 民俗 73

茶钵钵 $ts^h a^{13} p\Lambda\eta^{23-32} p\Lambda\eta^{23-45}$ 茶杯 民俗 106

本来“送饭婆婆”（＜“送饭牛牛”）であったものが、「茶碗」、更には鉢、ボールへの連想が働き、同義語の“盔盔”に改められたものか。山西で野良仕事中の夫に届ける弁当箱はボール状なのであろうか？諸賢の御示教を俟つ。

平遥方言の例はさておくとしても、上掲例のうち破線以下の“送饭牛牛”は $xu-: f-$ を区別する方言の例である。これらについては上記の説明が適用できない。本来、 $xu-: f-$ を区別しない方言で成立した語形を $xu-: f-$ を区別する方言が借用したということが考えられるが、そうであれば、 $xu-: f-$ を区別しない方言は威信方言であらねばならない。報告例の分布域は山西省の中部で太原の西南部に集中している。恐らくは太原を含むこの当りの方言が周囲に影響を及ぼしていたが、その中心の太原方言は普通話語形を用いるようになったために分布が西南に偏るようになったのだろう。上掲の $xu-: f-$ を区別する方言の例は山西省に限ってみれば、郷寧が西南部で離れているのを除けば、あとは太原方言の北部から北西部にかけて集中し、 $xu-: f-$ を区別しない方言と連続するように見える。想像を逞しくすれば、ここで取り上げた $xu-: f-$ を区別する方言も、かつては区別しなかったが、（今猶区別しない方言地域に比べ、交通の便が良いために）普通話若しくは他方言が浸透し、今では区別するようになった、そして“送饭牛(牛)”、“送饭婆(婆)”は新しい層の字音で発音されるようになったということかも知れない。

§6. “黄鹂”＋“黄瓜”→“黄瓜鹂”

陕西蓝田：黄瓜丽儿/ $huang^2\ gu a^1\ li^2\ r/$ 黄鹂 648

- 河南舞阳：黄鹭 $xuaŋ^{53} lu^{31}$ 黄莺 70
- 河南扶沟：黄鹭子 $xuaŋ^{53} lu^{31} tsɿ^0$ 黄鹂鸟 650
- 河南商水：黄鹭子/ $huang^{53} lu^{31} zi^0$ / 鸟名 350
- 河南郑州：黄鹭儿 $xuaŋ^{53} lur^{53}$ 黄鹂，也叫黄鹰 市志 569（“黄鹰”该改为“黄莺”）
- 河南卫辉：黄路儿 黄鹂（黄莺） 645
- 河南社旗：黄绿儿 黄鹂 476
- 河北满城：黄露儿 黄鹂 835
- 陕西凤县：黄瓜鸪 $xuaŋ^{24} kua^{31} lu^{44}$ 黄鹂 589
- 陕西陇县：黄瓜鹭 $xuaŋ^{24} kua^{53} lu^{44}$ 黄鹂 949
- 河南伊川：黄瓜鹿（儿） 黄莺 794
- 河北安国：黄萎儿 $xuaŋ^{22} lou^0 uər^0$ 黄鹂 927
- 山西屯留：黄萎 $xuaŋ^{13} ləu^{13}$ 黄鹂 35
- 陕西眉县：黄瓜路 $xuaŋ^{35} kua^{31-53} lou^{44}$ 黄莺 772
- 陕西兴平：黄呱了儿 $xuaŋ^{35} kua^{31} lər^{52}$ 黄莺 811
- 陕西户县：黄呱鸪儿 $xuaŋ^{35} kua^{31} ləu^{35}$ 黄莺 研究 288
- 陕西宝鸡：黄瓜落 黄鹂 1027
- 山西沁县：黄口老 $xu\tilde{\sigma}^{33} ku\Lambda?^4 l\sigma^{213}$ 黄鹂 27
- 甘肃康县：黄瓜喽 黄鹂 699（=甘肃宁县 203）
- 甘肃庆阳：黄瓜啦 黄鹂 484
- 甘肃舟曲：黄瓜奶儿 黄莺 676
-
- 河南济源：黄瓜鹂鹭 $xuaŋ^{31} kua^{44} li^{31} lu^0$ 黄莺 市志 515
- 河南泌阳：黄黄鹭 黄鹂 681
- 山西娄烦：黄鹂鹂 $xu^{33} li^{33} li^{33}$ 黄鹂 662
- 山西静乐：黄鹂鹂 $xu^{32} li^{33} li^{33}$ 黄鹂 648

“黄鹂：ウグイス”と“黄瓜”の合体である。「入れ子式」語構成に属する。上掲例は二つのタイプに分けられる。

xuaŋ li + xuaŋ kua → xuaŋ kua li

黄鹂 + 黄瓜 黄瓜鹂

xuaŋ li → xuaŋ lu → xuaŋ lu + xuaŋ kua → xuaŋ kua lu

黄鹂 黄鹭 黄鹭 + 黄瓜 黄瓜鹭

上段は連音変化を生じていない“黄鹂”が“黄瓜”と合体したもので、下段は不完全な畳韻化（介音の一致）を生じた“黄鹂”が“黄瓜”と合体したものである。

§ 7.1. “花姐姐” + “新姐姐：新娘” → “花新姐姐”

これは既に太田（2005）で指摘済みである。恐らくは本来「花嫁」を意味した“花姐姐”が「テントウムシ」を意味する語として使用されるに至った。そして、これに同じく「花嫁」を意味する“新姐姐”を合体させたものである。管見の及ぶ限りで、「花嫁」を“花姐姐”，“花大姐”という例は無い。“花街：色町”，“花界：花柳界”という同音（類音）語があるせいか，“花姐”で「旧時，売春婦，娼妓を意味した」と説明する辞書もある（愛知大学中国語大辞典第二版 p.791）。「テントウムシ」を意味する“花姐姐”，“花大姐”の原義はむしろ「売春婦」の方である可能性もあるが，他の例と照らし合わせると，“新媳妇”，“花媳妇”，“新娘子”などもまた「花嫁」の語形が「テントウムシ」に転用されている。“花姐姐”，“花大姐”の場合もまた同様に考えた方が良いように思える。「花嫁」を意味する異なる方言語形が融合して生まれたというべきであろう。「テントウムシ」を“新姐姐”と言う例は今のところ，見出していない。接合の仕方は「入れ子式」語構成というべきか。

宁夏同心：花新姐姐 xua⁴⁴ ɕin⁴⁴ teie⁵³ teie⁰ 花大姐（瓢虫）|| 回民称新媳妇

为“新姐姐” 118-119

cf. 新姐姐 $\text{cin}^{44} \text{tɕie}^{53} \text{tɕie}^0$ 新娘 157宁夏银川：花姐姐 $\text{xua}^{44} \text{tɕie}^{53-35} \text{tɕie}^0$ 二十八星瓢虫 词典 108宁夏银川：新娘子 $\text{ciŋ}^{44} \text{nian}^{53} \text{tsɿ}^0$ = 花姐姐 词典 310cf. 山西大同：新娘子 $\text{ciəy}^{31} \text{nib}^{313} \text{tsəʔ}^{32}$ = 新媳妇儿 78山西河津：花姐姐 $\text{xua}^{31} \text{tɕia}^{53} \text{tɕia}^0$ 瓢虫 研究 195山西高平：花姐姐 $\text{xud}^{33} \text{tɕid}^{212} \text{tɕid}^{212}$ 瓢虫 研究 113cf. 宁夏银川：花姐姐 $\text{xua}^{44} \text{tɕie}^{53-35} \text{tɕie}^0$ 臭板虫儿 志 95cf. 宁夏中卫：花姐姐 $\text{xua}^{44} \text{tɕie}^{13} \text{tɕie}^{53}$ 纺织娘 107山西太原北郊区：花大姐 $\text{xua}^{33-53} \text{ta}^{35} \text{tɕie}^{312}$ 七星瓢虫 研究 203甘肃天水：花花媳妇 $\text{xua}^{213} \text{xua}^{35} \text{ci}^{55} \text{fu}^{213}$ 七星瓢虫 175山西代县：花媳妇儿 $\text{xua}^{213-24} \text{ciəʔ}^{22} \text{fər}^{53}$ 瓢虫 研究 164

河南宜阳：花媳妇 瓢虫 697

cf. 河南鹤壁：花秀得 $\text{xua}^{33} \text{ciou}^{312} \text{tʂ}^0$ 新娘子 1596 ← “花媳妇子”河北行唐：花花轿 $\text{xud}^{213} \text{xud}^{213} \text{tɕiau}^{52}$ 瓢虫 685 ← “花花姐”？

河北吴桥：花花轿/huà huà jiào/ 瓢虫 528

河北武邑：花花轿 $\text{xua}^{34} \text{xua}^{34} \text{tɕiau}^{31}$ 瓢虫 829山东德州：花花轿 $\text{xua}^{213-21} \text{xua}^0 \text{tɕio}^{21}$ 瓢虫 77河北河间：花儿花儿轿 $\text{xuər}^{44} \text{xuər}^0 \text{tɕiau}^{31}$ 瓢虫 685 ← “花儿花儿姐”？河北灵寿：花儿花儿轿 $\text{xuar}^{22} \text{xuar}^{20} \text{tɕio}^{31}$ 瓢虫 705 ← “花儿花儿姐”？山东济南：新媳妇 $\text{ciē}^{213} \text{ci}^{21} \text{fu}^0$ 瓢虫 市志 136河南邓州：花姑娘 $\text{xua}^{44} \text{ku}^{44} \text{nian}^0$ 瓢虫 91山东宁津：花姑娘 $\text{xua}^{324-31} \text{ku}^0 \text{nian}^0$ 二十八星瓢虫 77

河南卫辉：花姑娘儿 瓢虫 646

山东临朐：红姑娘子 $\text{xuŋ}^{42-55} \text{ku}^0 \text{nian}^{42-55} \text{tθŋ}^0$ 花大姐 长编 38山东青州：红姑娘子 $\text{xuŋ}^{53-44} \text{ku}^0 \text{nian}^{53-44} \text{tsŋ}^0$ 二十八星瓢虫 山东词典 100

注：

- (1) “大蜗牛牛”の“大”についてはもう一つの推定が可能である。それは「コマを廻す」という単語が連想されることによって“打(陀螺)”と“蜗牛牛”をくっつけて“打蜗牛牛”となり、それが“大蜗牛牛”となったというものである。「コマを廻す」の語形の一端を以下に挙げる。

山西壶关：打老犍 $ta^{55} lo^{55} ciaŋ^2$ 抽陀螺 693

陕西旬阳：打坡牛 $ta^{42} p^{h}uo^{42} niou^{31}$ 打螺旋 624

cf. 山西永济：坡牛 $p^{h}o^{21} niou^{24}$ 种牛 36

cf. 陕西蒲城：犍牛 $p^{h}o^{31} niou^{24}$ 种公牛 708

山东阳谷：打皮牛 $ta^{55} p^{h}i^{42} niu^{42}$ 用布条拴在木棍儿上做成鞭子抽打陀螺，使其连续旋转 研究 213

cf. 皮牛 $p^{h}i^{42} niu^{13}$ 用木头削成的陀螺 研究 213

河南许昌：打皮牛 $ta^{55} p^{h}i^{53} niu^{53}$ 打陀螺 省志 220

河南新乡：打皮老犍 $ta^{55} p^{h}i^{53} lau^{55} tɕian^0$ 打陀螺 省志 220

河南沁阳：打犍牛 $ta^{53} maŋ^{44} ou^0$ 打陀螺 省志 220

新疆吉木萨尔：打牛儿 $ta^{51-53} niour^{51}$ 打陀螺 109

新疆哈密：打牛儿 $ta^{21} niur^{51}$ 冬天孩子们在冰上用鞭子抽打木制陀螺使其旋转的游戏 研究 168

「(雄)牛を打つ」という構成になっている。ムチでコマを叩いて強く回転させるところがムチを振って牛を働かせる様に似ているからこのようにいうのであろう。先に見たように「カタツムリ」や「タニシ」を“牛牛”という方言もある。“皮牛”は陽谷方言の語釈には木製のコマとある。他の地域でも同様なのかどうか分からない。或は“坡牛”が連音変化を生じてできたものかも知れない。“陀螺”はそもそも「タニシ」の殻で作られたものであろう。コマに鞭打って強く回転させることから牛を鞭打って働かせることとに連想が及ぶのは自然なことであろうが、コマの牛も元々は牛ではなくタニシであった可能性も検討してみるべきではないか。西北方言では「タニシ」と「カタツムリ」を分けない方言もあり，“蜗牛(牛)”が「タニシ」を指す例もある。“打牛牛”，“打蜗牛(牛)”といった語形が存在しないので，説得力に乏しいが参考までに記しておく。

(待续)

* 本研究は，平成16-18年度科学研究費基盤研究(B)“中国語方言の言語地理学的研究—新システムによる「漢語方言地図」の作成—”(研究代表者：岩田 礼)の成果の一部である。